令和８年３月２５日
No.１４

ぶんぶん

発行責任者
校　長　有﨑　美紀

府中中央小学校ホームページ　http://chuosho.fuchu-town.ed.jp

【修了式での校長の話】　　校歌で問い直す

今日は、府中中央小学校の校歌についてお話します。
１番には、何が歌われているでしょう。
「運動場」「両手をあげてふんばって」「丈夫なからだ育てつつ」
そうです。１番に歌われていることは、体のことです。つまり、一番大切にすべきことは、体、健康です。そういえば、１学期には、丈夫な体と心を育てる運動会がありましたね。

２番には、何が歌われているでしょう。
「豊かに伸びる」「望みは高くおおらかに」
そうです。まさに、「自ら伸びる」様子が歌われています。
そういえば、２学期には、豊かに自ら伸びようとする姿を表現する学習発表会がありました。

３番には、何が歌われているでしょう。
「夢いっぱいの教室」「人それぞれにめぐまれたものを立派に磨こうよ」
みなさんは、仲間と一緒に暮らす中で、「はちの子の心得」をもとに暮らしを問い直し、人それぞれがもつ良さを磨き合ってきました。３学期には、ぐんと成長した自分に出会うことができましたね。

私は、この校歌が好きです。中央小の１年間の暮らしとよく合っており、この学校が大切にしたいことが歌われているからです
また、校歌にある「毎日楽しい幸多い」というフレーズは、１番から３番の全てにある言葉です。学校というところは、お金では買えない幸せをみんなでつくっていくところですよ、とこの言葉が教えてくれているようにも思えます。
今日は、校歌についてお話をしました。あらためていい校歌だなと思ったでしょう。ここにいるみんなでこの校歌を大切に歌い継いでいきましょう。
さて、明日から春休みです。これまで、みなさんの見えるところでも見えないところでも、みなさんを支えてくれた先生や友達に感謝の思いを伝えて１年を締めくくりましょう。
４月。みなさんが元気に登校し、一堂に会したこの場所で、世界に一つしかない中央小の校歌を響かせてくれることを願っています。

【修了式児童代表の言葉】　　５年　代表児童

ぼくは、この一年間で「果敢に挑戦する力」が伸びました。

４年生の頃は、なかなか勇気がもてず、行事の実行委員や学級代表に立候補することが出来ませんでした。

そんな自分を変えるきっかけになったのが友達の存在です。その友達は、僕とは違い、いろいろなことに挑戦することのできる人です。その友達に「どうしてそんなに挑戦できるの？」と聞いてみました。すると、友達は、「もし落選しても、次の舞台で活躍すればいいんだよ。挑戦することが大切なんだ。」と答えました。ぼくは、友達の前向きな姿を見て、自分も前向きに挑戦しようと大きな一歩を踏み出すことができるようになりました。

学習発表会の実行委員に立候補したときには、練習の度に自分達の姿を振り返り、みんなの意見をまとめ、次の練習に生かしていきました。始めは、実行委員としてみんなの意見をまとめることに必死でした。発表会練習を重ねる度に、５年生らしい発表になっていく姿を見て、みんなの前に立つ喜びや楽しさを実感することが出来ました。学習発表会当日には、みんなで創り上げてきた喜びを胸に、保護者の方に学習の成果を伝えることが出来ました。

来年度、僕たちは最高学年になります。これまでの経験を生かし、縦割り活動や委員会活動では、率先してみんなを引っ張っていきたいです。ぼくは、「自分らしくいられる平和な学校」を目指しています。そのために、一人ひとりが失敗しても認められる・支え合えられる学校を創っていきたいです。また、これからも挑戦し続けられる自分でありたいです。

６年生　卒業おめでとう

卒業証書授与式

３月１９日（水）に第５６回卒業証書授与式が行われ、１４９名の卒業生が厳粛な雰囲気の中、巣立っていきました。これまで、６年生の子どもたちは、縦割り活動や委員会活動をはじめとして多くの場面で「あこがれのリーダー」として学校を支えてくれました。これまで学校を支えてくれた６年生、これから学校を支えていく５年生、ともに凛として式に臨む姿から成長を感じることができました。６年生は、これからも中学校で活躍してくれることを期待しています。また、６年生のために懸命に卒業式の準備や片付けをしてくれた５年生。今度は５年生が中央小のリーダーとして、学校を支えてくれると期待しています。

６年生のみなさん、卒業おめでとう！みなさんの輝く未来をいつまでも応援しています。

家庭・地域と共にある学校

第3回学校運営協議会

２月２５日（水）、第３回学校運営協議会を開催しました。授業参観をしていただいた後、学校より学校評価の最終評価についてご説明させていただき、委員の皆様からご意見をいただきました。とても温かく学校や子どもたちのことを見守っていただいていることに感謝しております。いただいたご意見を来年度の学校経営に反映させ、更に子どもたちが「自ら伸びる」教育活動を展開していきます。今後も地域・家庭・学校が連携しながら子どもたちの成長を支えていけるようコミュニティ・スクールの取組にご協力をお願いします。

学校評価につきましては、HP に掲載しますので、ご覧ください。

感謝の会　～サポーターさん、ありがとう～

３月３日（火）に、感謝の会を開きました。今年度も、交通安全見守り隊やクラブサポーター等、多くの保護者や地域の方がサポーターとして子どもたちの成長を支えてくださいました。この日は、日頃からお世話になっているサポーターさんに、子どもたちからのお礼のメダルをお渡しし、子どもたちと一緒に給食を召し上がっていただきました。子どもたちに声をかけてくださったり、質問に答えてくださったり、とても楽しい時間を過ごすことができました。お越しいただいたサポーターさんからも「とても楽しかったです。」「子どもたちから元気をもらいました。」という声をいただきました。地域の中で、子どもたちがたくさんの大人に見守られ、育てていただいていることに感謝しています。これからもよろしくお願いします。

4年生わくわくプロジェクト学年交流会　～地域の伝統を引き継ぎます～

３月９日（月）に、４年生が総合的な学習「わくわくプロジェクト」での学びのまとめとして学年交流会を行いました。子どもたちは、これまでに中央小学校の歴史や地域での活動等について調べるために、たくさんの保護者やサポーターや地域の皆さんからお話をうかがってきました。その学習を通して、自分たちの生活が多くの方々に支えられて成り立っていることに気付くとともに、自分たちが今後できることについて考えてきました。交流会では、これまでお世話になった方々に学習の成果を伝え、感謝の気持ちを表しました。

また、３月 15 日（日）には、くすのきプラザで開催された「あきふちゅう文化協会第４３回芸術祭」において、４年生有志の子どもたち 15 名が「里めぐり音頭」を披露しました。ふるさと府中町に愛着をもつとともに、伝統文化を引き継いでいきたいと気持ちを新たにしました。会場におられた町民の方々からも、「素晴らしかったよ。」「頑張って!!伝統を引き継いでいってね。」等と、お褒めの言葉と励ましの声をたくさんいただきました。

卒業記念オリジナル給食

６年生が家庭科の学習で、学級ごとに考えた給食１食分の献立が給食で出されました。「まごわやさしい」の食材をすべて使い、栄養のバランスを考え、見た目も彩りがよくなるように、６年生が学級ごとに相談しながら献立を考えました。献立には、食べた人たちがおいしさのあまり素敵な笑顔になりますようにという６年生の思いが込められており、献立に楽しいネーミングも付けられていました。４つの献立の給食はどれもとてもおいしくいただくことができました。はちの子たちにも大好評でした。

６－１
旬の食材入り
体ぽかぽか給食！

６－２
五感で感じる!!
彩り給食!!

６－３
元気 100 倍
パワー給食

６－４
春待ち
和ごころランチ

６－５
ボリュームと野菜たっぷり
はちの子給食

ありがとう　6年生～できるようになったよ　秘密のミッション～

１年生がペア学年の６年生に感謝の気持ちを伝え、喜んでもらうために、３月６日（金）に６年生の給食準備を行いました。卒業式練習をしている間に、６年生には内緒で準備を行いました。６年生が教室に戻ってくるまでに大急ぎで配膳し、黒板に感謝の気持ちを伝えるメッセージカードも貼りました。６年生は、教室に戻って給食の準備ができているサプライズに驚くと同時に、１年生の成長を喜び、１年生の感謝の気持ちを照れながらも嬉しそうに受け取っていました。

１年生は、生活科「できるようになったよ」の学習の一環としても給食準備が自分たちでできるようになったことを実践し、自分たちの成長を自覚するとともに人の役に立つ喜びも感じることもできました。１年生の自分たちの給食と６年生の給食を合わせて９クラス分の準備で大変でしたが、先生たちに手伝ってもらいながらも頑張ってやり切ることができ、大満足でした。

☆★☆おめでとうございます★☆★

☆府中町明るい選挙啓発ポスターコンクール☆

第３回 学校運営協議会 報告書

開催日：R8.02.25(水)9:15-11:45

文責：曽余田順子・R8.03.01

（１）学校長より年度末の学校の現状から（有崎校長）

・6年は、揺らぎのある子が多い学年である（主幹教諭が6年に入り頑張っている）。

・色々な子どもいるなかで、その6年生に、先日、山谷先生が「自分は、全員で卒業式を迎えたいと思っている。それは先生の力だけではだめで、みんなの力を貸して欲しい」と、言葉を詰まらせながら頭を下げていた。それを聴いていた子どもたちは、心を打たれているように見えた。

・また、修学旅行にも行っておらず卒業文集が書けない子どもに対して、その子の楽しみであった給食で働きかけ、内面を引き出して、「(給食を) 6年間ありがとう」と文集に書くことが出来た。栄養教諭も、その子の言葉に、これからの自分の仕事のやりがいを感じた。

・「節目をつけてやりたい」という教師の思いがある。

（２）学校参観および学校評価の説明

学校参観の後、主任・主幹・教頭より、今年度の最終評価について説明を受けた。

✧ **各柱の説明**：各主任

・柱ａ：枝正教務主任　・柱ｂ：綿貫研究主任　・柱ｃ：亀竹保健主事　・柱ｄ：下田主幹教諭

✧ **学校の方向性に照らしての問い直し**：白石教頭

（３）学校運営協議会委員による熟議

（出席者）小出、曽余田、松本、田中、濵田（PTA）、小濱・大葉・竹原（CS事務局）、
相星（府中緑中学校長）、有崎・白石・下田（府中中央小学校）

（陪席）枝正教務主任

✧ **第２回学校運営協議会の目的と方針**

・学校運営協議会として関係者評価を行うことも見据えて、第１回協議会で決定した次の４つの方針に基づき対話・議論することが、学校の最終評価の考察を深めて、来年度の経営方針の省察・刷新に向かう助けになることをねらう。

i. **自分も子どもを中心において関わろう（委員自身の倫理観）**

ii. **“失敗を許容しながら”という学校のあり方に注目しよう（評価の中核視点１）**

iii. **学びの結果ではなく“途中”にどのような「自ら伸びる」の学びが起こっているに注目しよう（評価の中核視点２）**

iv. **“学びの集中感・緊張感”がどのように生み出され高まっていっているかに注目しよう（評価の中核視点３）**

✧ **議長の選出**

・小濱委員長

★小濱委員長より：「最終評価ということで、結果をみせることが、ついつい気になるものだけれども、自分の言葉で語っていきましょう。」

(1) 熟議全体のけしき

(2) 委員の学校の自己評価に対する受け止め

（松本）（学校の参観して見えたことから自己評価を見直して…）

・（４つの柱とも）成熟度の評価が「３段階」になっているが、「４段階」ではないか。

（その根拠として…）

・若い先生が多いなかでの先生方の努力や先生方のまなざしの研鑽が見えた。

・１年生の全クラスの・黒板の「日直」の書き方からは、１学年の先生方が話し合ってやっている姿が見てとれて、素敵だなと思った。

・３年生も、（学級掲示をみると）学年のなかで試行錯誤しながらやっている姿が見えた。

→（校長より）学級掲示に関して…例えば係の掲示など、「作業」になりがちだが、中間評価を経て、「くらしをつくる」ということで、「何のために」を問い直して、３学期をスタートした。係の掲示の何げない言葉にそれが現れている。

（田中）（先生方の仕事の捉え方に関して…）

・柱Ｃでは、「教師自身が児童に任せる『怖さ』」が語られたが、「失敗してもいいじゃないか」で任せてみると、いいのではないか。何歳になっても、失敗して学べる。

→（校長より）「怖さ」について…教師は、「子どもに嫌な思いをさせたくない」と思っている。それが自分の評価になるという「怖さ」があると思う。

（小出）（教育活動を進める中で何を大切にすべきかの示唆として…）

・（自園では）俳句は、「自分の五感で感じ取ってほしい」ということで取り組んでいる。自分で意欲を持ってやっていくようにもっていくが大事。

・保護者への言葉がけも大切。（昔と違って）今は、保護者も、「やってもらって当たり前」になっておいる。例えば（自園で言えば）、「子どもは褒めて育てる」とか、（給食に関連して言えば）「手作りであたたかいご飯を」とか、（子どもという）白紙を染めていけるように、保護者への、努力への働きかけが大切。

（竹原）（参観した学校の具体から子どもを見ていく視座として…）

（学級掲示に着目して）

・4-1 は、係が会社になっていて、面白いと思った。3-3 は、「何のために仕事をするのか？」とあり、目的を持ってやっているんだなと思った。5-3 は、スケジュール帳が貼ってあった。いずれも、仕事ということで、責任感が出て、良いと思う。

・3-1 は、「ありがとう」とか、言われて嬉しい言葉があった。言える子も言えな子もいると思うが、言いやすくなるなと思う。

（自己評価の説明を受けて）

・子どもに全てを委ねる「怖さ」（「教師自身が児童に任せる『怖さ』」）について。親は、（学年末・卒業時に）子どもの「集大成」を求めるが、子どもは、いつも、すべて、「チャレンジ途中」だろう。だから「集大成」も、「チャレンジ途中」としての「集大成」という見方が大切。

・（いつも「チャレンジ途中」だという見方で）親も子を見守る、我慢する、ということが大事だと思う。

（大葉）（竹原委員の語りを CS や PTA・地域の目のあり方に繋いで…）

・CS で足りない所は、父親目線だと思う（先まわりしてしまうので）。PTA が加わることで、その目線が加わる。

・「親も見守る、我慢（竹原）」を言い続けていくにも、地域の目をやわらくしてあげることが、CS・PTA として大事。

・（柱 b で言及された）「座席表」に関しては、保護者も子どもが見てもらえていると思うのではないか。いいサイクルで進めているのでは？先生方も自信を持っていいのでは？

（相星）（緑中教育との繋がりを意識して…）

・「生きた言葉で語る」とあるが、中 3 の「自己表現」に繋がっていくんだなと感じた。

・中学校では、生徒は「人生の選択」は考えを言うが、一方で、（自分の）長所・短所は語りにくいと感じる。

・「子どもに委ねきれない」に関して、中学校も教師の喋りが多い。委ねて考える時間が大事。「どう？」と問いかけ考える時間を与えるのが重要で、ちょっとずつ手を離していかなくては…と考えている。

（濵田）（「ずれ」（学び）に向き合う視座として…）

・掲示物にも、先生の意図・子どもの学びが見えるんだ、ということを学んだ。

・（自己評価のなかでの「ずれ」の見方・考え方に対して）「ずれ」は埋めるのではなく…と言われたが、（「ずれ」をどう扱っていくか）難しい。それをどう昇華（消化？）していくのか？「何のために？」「どういう方向に向かうのか？」が考えられているならば、「ずれ」は埋めてもいいのではないか？

・やんやいう親はいるが、本当に子どもを見ている親は、文句は言わないものだ。だから、先生方は、あまりプレッシャーに感じず、職務を遂行してほしい。

・先生の立場に立っていえば、「教えること」と「学ばせること」があると思うが、子どもからすれば、先生が「教えること」は「教えてもらったこと」になり、先生が「学ばせること」は「学んだ

こと」になると思う。子どもに主体性を持つことを教えることは、一番難しい。

・「卒業を祝う会も学習」とある先生からきいたが、（子どもは）係（活動）も先生と話すことで学ぶだろう。活動を通して、正しく「ずれ」を埋めていけばよいのではないか。

⑶ 熟議を受けて自己評価を問い直す視点として

（小濱）（堀川小学校※の視察に照らし中央小教育の根本の問い直しとして）

※R8.02.20、富山市立堀川小学校を枝正教諭・森教諭・小濱委員・曽余田委員が視察。
柱 a の更新策については、枝正教諭が堀川小視察と重ねて語った。

・グランドデザインに山を越えていく図があるが、山を越えることをゴールとして捉えてやると、疲れるのではないか。子どもは「チャレンジの途中」であって、ゴールはない。「子どもから出てきたもので、その子らしい伸び方」を…という理念をずっと持っていくことが大切なのではないか。

・「生きた言葉」についても、揺さぶり心の中に何かが生まれたときに出てくるのが「生きた言葉」であり、それが「くらし」というになり、これを語り聴き合うことで、本当の伸びが生まれる。学校（大人）は、こういう「くらし」を準備しいたい。全員が…というのは無理で、そういう「空気感」を耕していければ…と考える。

・富山市立堀川小学校を視察したが、堀川小に掲示してあった子どもの作品には、「その子のねがいや思い」が書いてあって、「どこをどう頑張ったか」ではなかった。それをみた時、中央小は、まだまだやることがあるなと思った。（中央小でも、子どもの「ねがい・思い」が書かれている（竹原委員談）が、教育としての価値づけは、「どこをどう頑張ったか」に置かれているのではないか。）

・（こうしたことのためには）「何に大人がひっかかって、どう仕掛けていけるか？！」が勝負である。

（曽余田）（来年度に向けて自己評価を修正更新する方向性として…）

・最終評価の説明の仕方は、中間評価の時に比べてよくなったと思う。説明された先生も、評価する際の方向性が、中間評価の時にどう違うか、感じ気づくことができたのはないか。

・ただ、柱 b については、全体から浮いていたと考える。その原因は、さまざまな取組みを通しながら、「“集中感・緊張感”」という価値（核）の深まりを探究・追究すると考えるのではなく、「“集中感・緊張感”のある授業」という短期経営目標（ゴール）を達成するための方策として取り組んだことを羅列的に、その内容を説明することに終止したことにあると考える。柱 b の説明として期待することは、研究内容の報告ではなく、柱 b の取組みが、いかに、「“集中感・緊張感”のある授業」を生み出す学校の体制づくりに機能さえ得たか、であるということである（これは、他の柱も同様）。

・「学校の大きな方向性に照らして（問い直し）」で、「そこで、来年度は『『連携』から『協働』へ」をキーワードとして」と書かれているが、『『連携』から『協働』へ」は、転換する方向性であって、これ自体はキーワードにはならない。このことは、12 月末の第 2 回ミニ学校運営協議会の際に、『『連携』から『協働』へ」転換を図る際重要なことは、「価値探究的な学習によって「協働」を起こしていくことは、経営計画で示されてきた「学習集団づくり」である」と言及している。

・このことを今回の最終の自己評価につなげて言えば、柱 a「学年を超えて交流する教職員集団」に関して課題意識を持ちながら堀川小の視察した枝正先生が、視察の気づき・学びとして堀川小の「互見授業」の文化を捉えて、柱 a の更新策を語られたことは、非常に重要である。これは「柱 a の更新策」に止めるのではなく、学校として「価値探究的な学習によって「協働」を起こす」営みとして意味づけ・価値づけることができると考えるからである。これは、今回の協議会で焦点があたった柱 c で語

られた先生方の「怖さ」を問いなおし、中央小の「ひらかれた教育風土・文化の醸成」につながると考える。

（4）来年度へ向けて熟議を踏まえ学校へ提案すること

✧　学校運営協議会の学校との関わりから

・第1回学校運営協議会で定めてた4つの指針を視点にしながら、1年間学校に関わってきた。熟議を振り返ると、「(子どもも大人も）チャレンジの途中」ということが、協議会で「子どもが育つ土壌づくり」を見つめ、語り合う際のキーワードであった。

・第3回協議会の後の談話としては、今年度は「よく学校が見えなかった（本当にしたかったことは何だったのか)」といことが上がっていた。これには、12月末の第2回学校運営協議会の際には、設定した「子ども観」が、取組みを通して、どう見直されたかと投げかけたが、最終評価では、成熟度で示されていることがどう達成されたか、という振り返りの仕方であって、取組みを通して、年度当初想定した学校づくりや教育の考え方自体が、どう見直し問い直すことができるようになったか、つまり、どう学校という土壌が耕されていきているかは語られなかったことも大きい。

✧　来年度へ向けての提案

・よって、来年度へ向けて、学校が最終評価の考察を深めて経営方針の省察・刷新し、学校運営協議会としても、「子どもが育つ土壌」としての可能性を見取り来年度につないでいくために、次の3点を提案する。

① 自己評価表の「ビジョン実現に向けての現状と今年度の位置付け」および「学校経営の柱に係る考え方」に立ち戻り、今年度、実際に日々の教育実践のなかで先生方が大切にし、そこで探究・追究されたことは何だったのか、「チャレンジの途中」という視点で、PDCAの「C（Check)」として再度問い直して欲しい。

② 教師の「怖さ」ということが語られたことは意義深いが、「怖さ」を実体化するのではなく、そこにある一人ひとりの先生方の目の前の子どもたちに対する「ねがい」やその子どもたちとどんな教育を追究したいと「ねがって」いるかのかという教育への「思い」を、「チャレンジの途中」という視点で、PDCAの「C（Check)」として、具体で問いなおして欲しい。

③ 「学校（地域）は子どもが育つ土壌」として何を価値として大切にして来年度に繋げていくのかを、①②を考察しながら「『連携』から『協働』へ」転換を図ったいくためのキーワードとして打ち出して、「学校の大きな方向性に照らして（問い直し)」として表現し直し、再度示して欲しい。

（以上）